



TITLE:

倭王権と前方後円墳(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

岸本, 直文

CITATION:

岸本, 直文. 倭王権と前方後円墳. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12902>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	岸本 直文
論文題目	倭王権と前方後円墳		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>古墳時代は、農耕社会が定着した倭の社会に、倭王権を求心核として列島諸首長が結びつく関係が成立し、前方後円墳の築造を通じて、その枠組みを維持した時代である。前方後円墳こそ、3世紀から6世紀までの400年間にわたる倭国の国家体制を体现する古墳時代の本質を表す考古資料といえる。</p> <p>本論文は、主として前方後円墳を資料として、古墳時代における倭国王と地域首長の関係を示す前方後円墳共有システムの具体像を明らかにし、墓制に身分秩序を表す制度がどのようなものであったのか、その実体を提示することを第一の目的とする。また、倭国王墓の系列と変遷を整理し、相似墳の現れ方を通して、古墳時代の歴史的動態に迫るとともに、倭の王権構造の特質について論究する。</p> <p>序章において、倭王権の成立と前方後円墳にかかわる研究史をたどり、研究の現状を整理し論点を明確にした。倭王権の成立については、母体となった畿内ヤマト国の評価、前方後円墳の起源、そして古墳時代への転換など、まだ理解は定まっていない。前方後円墳の形態研究については、倭国王墓を規範として相似墳が築造される一端が明らかにされているが、倭国王墓がどう推移したのかは明らかではなく、相似墳の指摘も一部にとどまっており、古墳時代を通した前方後円墳共有の具体像は解明されていない。</p> <p>第1章では、まず倭王権の成立過程について論じた。最新の年代観をもとに、弥生時代後期のヤマト国の形成、2世紀前半の纏向遺跡の成立、2世紀中頃のヤマト国王墓としての前方後円墳の創出、さらに2世紀後半にヤマト国が求心力をもち始めていることを論じた。その上で、2世紀までがヤマト国を含む広域地域圏の割拠する弥生時代、3世紀以降が倭国の成立した古墳時代とすることを主張した。</p> <p>弥生時代後期におけるヤマト国の墓制として2世紀に生まれた前方後円墳は、倭国王卑弥呼の共立により成立した瀬戸内一帯が結びつく倭国において、3世紀前半に共有が始まる。次いで、巨大な倭国王墓である箸墓古墳が築造され、これを起点として3世紀後半から4世紀前葉にかけて列島規模に拡大する。第2章と第3章では、その波及過程を追究する上で年代指標となる三角縁神獣鏡について分析した。三角縁神獣鏡は<魏志倭人伝>に見える「銅鏡百枚」に結びつけうると考えられ、魏との朝貢関係に入る239年以降、3世紀後半に多量に倭国にもたらされ、4世紀には国産され、古墳時代前期前葉から中葉にかけて長期にわたり主要な副葬品目であり続けた。第2章において、多様な三角縁神獣鏡について神獣像表現にもとづく整理を試み、製作動向について見通した。第3章では、三角縁神獣鏡の編年案と年代観を提示し、これにより前期古墳が時期区分できることを示した。さらに、こうした三角縁神獣鏡にもとづく前期古墳の年代観により、箸墓古墳を3世紀中頃に特定することができ、初代倭国王卑弥呼の墓である蓋然性が高いことを論じた。</p> <p>箸墓古墳を起点として、倭国王墓を規範とする前方後円墳共有システムは本格的に発動することとなり、古墳時代における倭国王と地域首長の関係を規定するものとなる。前方後円墳共有システムの具体像解明においては、倭国王墓の研究がまず出発点となる。巨大な倭国王墓は、新たに生まれた国家的枠組みを維持するため、かつてない規模に造り上げられ、倭国王の地位を視覚的に明示するものとなるが、前方後円墳は倭の諸首長が共有するものでもある。前方後円墳の共有は、倭国王に結びつく列島諸首長の連合関係を示し、倭王権が主導する倭国の枠組みに寄与していることを表現</p>			

するものであったと思われる。第4章以下では、前方後円墳を代表する古墳の築造が、倭国における身分秩序として機能する制度ともいえる内容をもつことを、具体的に提示することを課題とした。

まず第4章で、箸墓古墳以後の倭国王墓を取り上げ、前代のものを元に仕様を更新し、変化を遂げる過程を示した。また、倭国王墓の推移を整理することにより、箸墓古墳に始まる主系列と、桜井茶臼山古墳に始まる副系列に分かれることを明らかにした。これにより、オオヤマト古墳群から佐紀古墳群へ、また佐紀古墳群から古市・百舌鳥古墳群へ、さらに古市・百舌鳥古墳群末期と継体との関係など、倭国王墓の所在地が重なりをもちながら推移する実態や、2系列の併存関係を示した。また、倭国王墓の相似墳が王墓ごとに存在することを示し、王権と地域首長のより直接的な関係を示すとみられ、倭国王墓を規範として相似墳が築造されるあり方を復元することができた。

第5章では、墳丘規模の序列を明らかにした。前方後円墳の規模が地域首長の地位を反映することは容易に想像できるものの、その具体像は明らかになっていなかった。本章により、墳丘規模が中国尺の6尺1歩の5歩単位というランキング設定であることを明らかにし、身分秩序の表現方式の一端を解明した。

以上、第4章と第5章により、倭国王墓を規範に規模の格差をともなって相似墳・類似墳を造営することを、歴代の倭国王ごとに更新し繰り返すことが、古墳時代を規定した制度であると考えられ、これを「前方後円墳共有システム」と呼ぶことにした。

以下、第6章から第10章までは、オオヤマト古墳群に築かれた倭国王墓である、箸墓古墳・桜井茶臼山古墳・行灯山古墳・渋谷向山古墳を取り上げ、墳丘を復元し、その設計寸法を推定し、前代の王墓を元にどのように仕様を変更して新たな王墓を設計しているのか、可能な限り検討した。また、それぞれの王墓の相似墳を提示した。第6章から第10章において、一つひとつの倭国王墓について、相互の関係をふまえた上で、埴輪や副葬品編年の上に位置づけ、また暦年代の推定を積み上げることで、全体として確度の高い推移を明らかにすることができた。また、西殿塚古墳を加え、オオヤマト段階の倭国王墓6基が、2系列各3基に分かれることを示し、同系列墳の被葬者に性格差がうかがえることに言及し、神聖王と執政王からなる倭の王権構造を復元した。

第11章では、佐紀古墳群の倭国王墓を検討し、また各地の古墳と古墳群のあり方に現れる現象を整理し、オオヤマト段階に前方後円墳を築いた首長系譜が退転し、特定首長がそれまでにない大型前方後円墳を築造する変化が生じていることを示した。さらに佐紀陵山古墳の年代を絞り込んだ上で、その相似墳が大阪湾岸や丹後半島に出現することから、海上交通の掌握が進められたと推定でき、4世紀中頃に金官国の要請を受けて朝鮮半島に派兵することが始まったのではないかと推定した。

第12章は、河内の玉手山古墳群と松岳山古墳を取り上げ、オオヤマト段階から佐紀段階へ、また古市・百舌鳥段階へと推移する倭国王墓と対比した。オオヤマト段階に対応して、玉手山古墳群で相似墳が繰り返し築造されていることを示し、佐紀段階になると、第11章で取り上げた他地域と同様に、玉手山古墳群と交替するように松岳山古墳が現れるとみることができる。しかし松岳山古墳も後続せず、4世紀後半には、在地首長の起用から、佐紀政権による河内の直接的掌握が進められたと考えられる。古市古墳群最古の津堂城山古墳の被葬者は、松岳山古墳に後続する在地勢力とは考えにくく、河内に送り込まれた佐紀政権内の人物と推測され、河内における活動のなかで権力基盤を構築し、河内政権を樹立したものと考えた。

第13章では、第4章で示した倭国王墓の2系列の問題を取り上げ、古墳時代には2人の王が並立していたと結論した。第6章から第10章におけるオオヤマト古墳群の6基の前方後円墳の分析にもとづき、神聖王と執政王という2王の並立を導いたが、そ

れを承け、王墓の2系列が存続する古墳時代中期においても、王統差ともいえる2王並立が継続することを示した。とくに、副系列墳である上石津ミサンザイ古墳・菅田御廟山古墳、そして主系列墳である大仙古墳は、それまでになく巨大化した3基であるが、そこに副系列墳の優位から、5世紀第2四半期を活躍期とする主系列墳である大仙古墳被葬者への優劣の逆転があり、いわゆる履中系から允恭系への転換に対応することを論じた。

国家的祭祀を司る倭国王を立てながら、統治を担う地位もまた定められ、こうした分掌体制にあったことが倭王権の大きな特質である。当時の首長権の分掌的あり方は、前期古墳の複数埋葬からほぼ共通理解になっており、こうした倭の権力構造からすれば、王権も分掌的であったと考えることができるだろう。そして、実際に倭国王墓に2系列があり、その被葬者の性格差について一定の言及が可能である。そこで、神聖王と執政王が並立する「政祭分権王制」と呼ぶべき王権構造を提起することとした。

終章では、本論文で論じたことをまとめたが、とくに倭国王墓と各地の前方後円墳のあり方から読み取れる古墳時代の社会変動を整理した。オオヤマト段階における前方後円墳の波及、そのなかでも4世紀前葉が倭国王墓の規範性が強まる時期であること、さらに東アジア情勢と関係づけ、オオヤマト古墳群から佐紀古墳群への墓域移動について言及した。佐紀段階の現象は、倭の半島派兵を示し、倭王権と地域首長の関係が、軍事的提携を軸とするものに転換することを示すのだろう。そして佐紀政権段階に、河内の直接的掌握へと進み、佐紀の執政王と同格といえる津堂城山古墳の被葬者が、河内での活動をもとに権力基盤を固め、河内政権を樹立したと考えられる。河内政権下でも2王並立は存続し、内部に王統差を内包しており、5世紀中頃に優劣の逆転があった。さらに古市古墳群における執政王墓の断絶に、雄略没後の不安定をうかがうことができ、継体擁立へと進み、河内政権最後の神聖王である仁賢の死没により、倭国王は継体段階に一本化する。

前方後円墳の共有に示されるように、倭国王を戴きつつ列島諸首長が結びつく連合体として倭国は出発し、地域権力は倭国の枠組みに包摂される。倭国王を代表権者とする倭国の枠組みは早い段階で固まり、倭国王墓を規範として前方後円墳を築造するシステムは持続する。しかし出発時点の連合的な体制にも起因し、王権基盤は不安定であり、いくつかの政変を生じ、王権主導勢力は交替し、それによって地域権力も優劣がめまぐるしく変化する。地域の古墳や古墳群のあり方に、如実に地域社会における優劣関係の交替や、王権動向の影響を読み取ることができる。そこに、中央権力と地域首長からなる国家的枠組みが、連動して変動を繰り返している様相をうかがうことができる。こうした未成熟で不安定な体制ではあったが、前方後円墳共有システムは古墳時代を通して持続し、倭王権は中央権力として存続し、やがて地域権力を押さえ込むことになる。

また、倭国王墓とみなしうる巨大前方後円墳には、長期にわたり2系列が併存し、王権の権力構造が分掌的であることを導き、政祭分権王制論を主張した。古墳時代史の理解の上でも、倭王権が神聖王と執政王の2王からなるとの理解を導入することで、王権内部に競合的な関係を内包しており、地域首長を巻き込んで政変が繰り返された実像やその要因解明に迫ることができると思われる。津堂城山古墳に始まる河内政権の成立や、5世紀中葉における主導権の交替、雄略によるイチノベ殺害や継体擁立の意味など、政祭分権王制により、記紀の記述をあわせ、古墳時代の事象を説明しうるのではないかと考えられる。また、倭国王位は6世紀に一本化するが、大兄制はその残存と考えられ、飛鳥時代までその影響は残っていくように思われる。

終章の最後で、倭国における国家形成の特質が、古墳時代社会を規定したことを改めて論じた。

倭王権の政祭分権王制は、前代以来の分掌的な権力のあり方を基礎としながら、倭

国大乱が軍事的結着でなく巫女王を擁立することで収束され、倭国が誕生した経緯の産物であるように思われる。弥生時代の広域地域圏の競合が持続していれば、さらなる統合は軍事的結着によるほかに、そうしたプロセスをたどった場合、やはり軍事的能力に長けた男王が求められるであろう。しかし、倭国の場合、競合が激しくなる前に宗教的能力をもつ女王を立てることで休戦が図られ、国家の枠組みができあがる。倭国が祭祀的権能をもつ者を王としたこと、これが倭王最大の特質である。墳墓に身分秩序を表現する仕組みが埋葬施設を含めてこれほどに整えられ、古墳時代400年間にわたり10数万基の古墳が築造される本源は、卑弥呼共立による連合的体制のもたらしたものといえるのではないか。

卑弥呼が倭国王となることで、男王は後景に退いたが、卑弥呼没後、倭国王を男王とすることが企てられる。しかし同意は得られず、第2代の倭国王も女王となり、倭国王を祭祀的権能をもつ者とするのが定着したといえる。一方、倭国に結びつく諸首長が列島規模に拡大する3世紀後半において、軍事権を有し一定の強制力をもつ統治者もまた不可欠であり、重要性は増していたに違いない。第2代倭国王である台与墓とみられる西殿塚古墳とともに、桜井茶臼山古墳が築造される点に、執政王と呼んだもう一つの王位も確立されたと考えられる。これにより倭王権独特の政祭分権王制が確立する。

倭国においては、倭国大乱を収束させるために神聖王が倭国王となったことで、執政者が従となる形の王権が生まれたのである。神聖王・執政王的存在はともに必要であるが、倭国の場合、執政王が倭国王にならなかったのである。神聖王が倭を代表する王となるのが定着することで、これに執政王が並び立つ王権ができあがったといえるだろう。

(論文審査の結果の要旨)

古墳研究は、日本列島における古代国家形成史を考える上での重要な主題として、日本考古学のなかでも研究史や研究者の層が最も厚い分野となっている。それは日本古代史における「邪馬台国論争」や「倭国史」にも重なり、日本古代史研究者による関心も高い。しかし、研究史や研究者層の厚さに比例して、鏡・装身具・埴輪・武器武具・馬具など、研究対象が細分化・精密化し、古墳自体を直接の資料にして、日本古代国家形成史や倭国史を描き出す試みは意外と少ない。

論者は、古墳時代を特徴づける「前方後円墳」という考古資料を具体的かつ詳細に分析し、文献史料をも活用しつつ、三角縁神獣鏡や埴輪などの考古資料の研究成果も合わせて、上記の主題に意欲的に挑戦する。とくに、以下の3点において、新たな研究視角を提起し、分析を深め、独自の成果を挙げたことは高く評価できる。

- 1) 近年、注目されているAMS法による炭素14年代を根拠として、弥生V期から庄内式・布留式の土器に実年代を与え、古墳時代のはじまりに関して、論者は新たな見方を提示した。すなわち、ヤマト国(邪馬台国)の本拠地となる纏向遺跡が2世紀の第2四半期に始まり、2世紀後半には列島における求心性を高めて、石塚をはじめとする纏向型前方後円墳を生み出す。そして、3世紀前半には、纏向型前方後円墳と墳形を共有する墳墓が、瀬戸内海で結ばれる西日本の特定地域で作られる。これをもって、論者は古墳時代の始まり、すなわち古墳時代早期と位置づける(第1章 倭の国家形成と古墳時代開始のプロセス)。
- 2) 纏向遺跡を本拠として築造された6基の巨大前方後円墳(箸墓古墳・西殿塚古墳・行燈山古墳<主系列>、桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳・渋谷向山古墳<副系列>)、佐紀遺跡を本拠として築造された4基の巨大前方後円墳(宝来山古墳・五社神古墳<主系列>、佐紀陵山古墳・佐紀石塚山古墳<副系列>)、津堂城山古墳以後に展開する古市・百舌鳥古墳群(河内王権の墓所)を構成する巨大前方後円墳(仲津山古墳・大仙古墳・土師ニサンザイ古墳・前の山古墳<主系列>、上石津ミサンザイ古墳・誉田御廟山古墳・市野山古墳・岡ミサンザイ古墳<副系列>)を、論者は築造規格から3世紀後半～5世紀にいたる倭国王墓における2つの系列と位置づけ、主系列を神聖王墓、副系列を執政王墓ととらえ、倭王権を政祭分離王制とみる。さらに、継体天皇の今城塚古墳以降、倭国王墓が一本化するととらえる(第4章 前方後円墳の系列と変遷、第13章 前方後円墳の2系列と王権構造)。これまで一部の巨大前方後円墳を「ヒメ・ヒコ制」や「聖俗二重王制」の反映ととらえる考えは提起されているが、前方後円墳の築造規格を根拠に、3世紀後半～5世紀に一貫して倭国王墓が2系列で築造されたとする説は初めてで、その論拠も強固である。政祭分離王制論とともに今後、議論を呼ぶものと思われる。
- 3) 倭国王墓と位置づけた巨大前方後円墳に関しては、各地域において、より小規模な相似墳の存在が指摘できる。前方後円墳が倭国王を頂点とする身分秩序を表現し、中央と地方の連合関係を反映するという「前方後円墳体制」論は定説化しつつあるが、論者は倭国王墓を基準に、1尺23.1cmの漢尺による5歩を単位として相似墳の墳丘規模がランキングされている事実を指摘する。相似墳論も尺度論も既存の研究成果であるが、厳密に墳丘規模を検討し、両者を総合して「前方後円墳体制」論に具体的な数値を与え、肉付けしたのは、論者の大きな成果である。論者は相似墳の共有を強調して、これを「前方後円墳共有システム」と呼んでいる(第5章 前方後円墳の墳丘規模、第6章 箸墓古墳の墳丘と相似墳、第7章 桜井茶臼山古墳の歴史的意義、第8章 メスリ山古墳と政祭分離王制、第9章 行燈山型の前方後円墳、第10章 渋谷向山型の前方後円墳、第11章 佐紀古墳群と半島派兵)。

論者が展開した前方後円墳の築造規格論や尺度論は、宮内庁が管轄する陵墓に関しては、公表された実測図をもとに議論しているが、桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳・玉手山古墳群などに関しては、既存の測量図では飽きたらず、自らチームを組んで測量調査をおこなった成果にもとづく。「前方後円墳」自体を分析対象とする以上、厳密なデータは必要不可欠なので当然といえる。しかし、ここ数年の間に、生い茂った木の間をぬって地表の等高線を描き起こす航空レーザー測量などの新技術が著しい成果を挙げつつある。手間暇をかけて地上で手測りするよりも正確な測量図が、短時間で得られる道が開けたのだ。宮内庁管轄の陵墓についても、既存・公開済みの測量図より厳密な航空レーザー測量図の作成・公開が進んでいる。大きな変更はないと思うが、論者の検討成果は、新技術による新測量図にもとづき、再検証を継続する必要がある。また、3世紀後半～5世紀の主副2系列の前方後円墳の被葬者に関して、論者は記紀の記載から、その人物を積極的に指摘しようと試みているが、これらも今後の論議を呼ぶものと思われる。

以上、今後に残された課題は多いが、論者が新たな視点で新たに生み出した成果は大きく、古墳時代史・倭国史を語る上で避けて通れない。ただし、3・4世紀史に関しては、前方後円墳の築造規格、AMS法による炭素14年代、三角縁神獣鏡の系統論と編年、初期埴輪などの資料を駆使して多面的に論証しているが、5・6世紀史に関してはやや手薄である。航空レーザー測量図による検証を含めた、さらなる追究が望まれる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年1月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。